

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520223

研究課題名(和文) 1890-1910年代の日米における国家主義と作文教育

研究課題名(英文) Nationalism and the literary education between 1890-1910 in Japan and the USA

研究代表者

北川 扶生子 (KITAGAWA, Fukiko)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：70304079

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ふたつの日本語文学圏 - 米国日系一世コミュニティと日本国内 - における文学作品や投稿作文について、日本語の書き言葉が言文一致体に収束してゆく19世紀末から20世紀初頭の時期に焦点をあてて調査を行った。その結果、両地域において、古典的な修辞の型を利用した表現が広く浸透し、それが国民国家構築のために大きな役割を果たしたことがわかった。とくに、これまで評価すべき文学活動はなかったとみなされてきたハワイにおいて、豊かな日本語文学作品が数多く残されていることを明らかにし、そこにみられる古典的・類型的表現が、現地日系人コミュニティの統合に大きな力を発揮したことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：In this study, literary works and readers' literary contributions from two spheres of Japanese language writing - Japan proper and Japanese issei (first generation) community in the USA - are surveyed, with a focus on the period from 19th to the early 20th century, when genbun itchi - or the convergence of the written and spoken forms of the Japanese language - began to occur. The results of the survey indicated that in both regions, expressions in the classical rhetoric styles are widespread, and that this played an important role in the building of a national identity. In particular, in Hawaii, which has thus far not been considered to have a literary culture that is worthy of evaluation, it was established that many rich Japanese language works have been handed down. It was also noted that the classical typological expressions found in those works exerted great power in the integration of the local Japanese American community.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：移民 作文 国家主義 国際情報交流 日本文学 日本語教育 日系アメリカ人 自然表象

1. 研究開始当初の背景

(1) 小説の成立と書く読者

近代日本における小説というジャンルの成立と、小説読者の書く行為は、深く結びついている。これは、文芸ジャンルの再編成プロセスと作文ジャンルの歴史的变化との対応からもわかる。たとえば、夏目漱石の初期作品は、滑稽本、読本、紀行文など、江戸文芸の諸ジャンルに由来する約束事(文体、プロット、読みのコードなど)を駆使しているが、これらのジャンルは、同時代の文芸雑誌・学生向け雑誌・投稿専門雑誌等の投稿欄や作文書に見られる作文のジャンル区分(美文、写生文、叙事文、叙情文、小品文、紀行文など)と対応している。

『明治期刊行図書目録』は2713点の作文書を記録しているが、これはもっとも発行点数の多い「近代小説」(3071点)に次ぐものであり、作文は明治文化において大きな領域を占めていた。以上の点から、近代小説というジャンルの成立を支えたのが、これらのみならず書く読者たちであったことが予想され、読者の書く営みと、文学作品や文学をめぐる諸制度との関連を明らかにする必要があると考えた。

(2) 内地における文学と作文

近代小説とその読者層が形成される19世紀末から20世紀初頭の日清・日露戦争期に焦点をあてて、作文書や雑誌投稿欄に掲載された作文の主題や文体を調査すると、もっとも多く見られるのは、四季折々の美に溢れる美しい故郷を、古典的修辭を駆使して歌いあげるといったものである。作文投稿制度は、中等教育層を、「四季美溢れる自然に恵まれた故郷」という帰るべき場所をもちながら、国家主義のもとで展開された資本主義体制下の競争に参入してゆく主体に作り上げる場として機能したと考えられる。そして、そのような書く営みと、文学という領域の成立は深く結びついていることが想定された。

2. 研究の目的

以上のような想定のもと、本研究では、日本国内で発行された作文書や雑誌投稿欄の調査を進めるとともに、同時期にアメリカ合衆国やハワイに移り住み、日本語で読み書きした日系移民一世の日本語文学作品と比較することを旨とした。

1890年代から1910年代の日清・日露戦争期において、作文教育と投稿制度は、中等教育層を国民化するために大きな役割を果たした。本研究では、国内における「国語」思想の成立を踏まえ、日本国内と米国における日本語文学作品・投稿作品を、自然観や故郷観とその表現方法に注目しながら比較し、「日本語で書くこと」と「国家主義」がどのような関係にあったのかという問題を解明

することを目的とした。

すなわち、国内においては、無意識的に一体化しやすい日本語と自然美と故郷観や国家観とが、異なる言語・気候のもとに生きる人々の間でどのように機能したのかを探り、国内外での状況を比較することで、文学や言語と国家主義との関係をめぐる新たな視座を得ることが出来ると考えた。その際、とくに古典的定型表現の役割に注目し、言語表現の歴史的蓄積が、共同体形成にどのような機能を果たすのかを明らかにしようとした。

3. 研究の方法

言文一致体が普及し、小説というジャンルが成立してゆく19世紀後半から20世紀初頭の日清・日露戦争期に焦点をあてて、次の2つの側面から研究を行う。

(1) 日本国内で発行された作文書や、文章雑誌・文芸雑誌・学生向け雑誌・投稿専門雑誌等の投稿欄に掲載された作文の、主題・ジャンル・文体等を調査する。この調査を通して、近代小説ジャンルの成立を、印刷メディアの発展、小説読者層の創成から考察するとともに、中等教育層の書く営みが、文学を経由していかに国家主義の成立を下支えしたかを考察する。

(2) この時期、多くの人々が出稼ぎや留学のために渡航したアメリカ合衆国西海岸地域およびハワイにおいて、19世紀末から20世紀初めにかけて発行された日本語新聞・雑誌の調査を行う。その際、文芸作品、文芸関連記事、投稿欄を重点的に調べ、掲載作品の主題・ジャンル・文体と、日系人コミュニティの動向との関連に留意する。同時に、米国日系人社会で用いられた作文書・副読本類の調査も行う。さらに、渡航に関してどのような情報が国内で流通していたのかを知るために、ハワイや北米等での労働や留学を勧め現地情報を伝えた移民関連図書、総合雑誌や経済雑誌等における移民関連記事等も適宜参照する。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の2点に大きく分けられる(下記5.参照)。

(1) 日本国内における文学と作文

作文の時代

近代日本の小説読者層の形成が、読者が文章を書き投稿するという営みと一体となって進められたこと、投稿作文の様々なジャンルとその特色について明らかにし、著書『漱石の文法』第1章「書く読者たち」・第1節「作文の時代」および論文「阪本四方太と写生文」で述べた。

作文と規範

投稿作文が様々な規範のもとで生産されていたことを、立身出世主義、天皇制とジェンダー、帝国主義化における古典文化の役割等の観点から分析し、講演「私をつくる教室 - 文・メディア・自然 - 」でその一部を述べた上で、著書『漱石の文法』の第1章第2節「作文をめぐる制度」および論文「見出される 帝国日本 の文化 - 日清・日露戦争期の作文教育と自然・故郷・古典 - 」にまとめた。

故郷観・自然観との関係

投稿作文にもっともよく見られる型は、故郷の美しい自然を古典的定型表現を駆使して歌いあげるものである。このような作文は、地方から都市部へ立身出世を目指して出郷した青年たちが、美しくかけがえのない故郷 という価値を構築することで、資本主義体制下の競争に参加してゆく主体を形成する機能を持ったことを明らかにし、論文「美しい故郷 の描き方 - 1890-1900 年代における出郷物語とレトリック」および著書『漱石の文法』第1章第3節「美しい故郷の描き方 - 立身出世物語とレトリック」(前掲論文に大幅に加筆)で述べた。また、自然表象の史的变化の一例として、近代日本における蘚苔類の表象が、古典文化への連想に満ちた定型表現を次第に脱し、光学機器の大衆化によって変容していく様を、論文「日本近代文学におけるコケの表象とその変容」で概観した。

作者・作家像の歴史的変化と 書く読者

みずから文章を書いて雑誌などに投稿し、書くためにプロの文章を読む読者から見ると、作者や作家という概念はこれまでとは違った姿を見せる。このことを夏目漱石と太宰治を例に明らかにした。

夏目漱石は、小説家として人気を博する以前に、文章家として認知され親しまれていた。このことは、戦前期を通じて数多く出版された文範集 - 作文の手本となる名文の抄録集 - に、『草枕』『虞美人草』『吾輩は猫である』『倫敦塔』などの作品が高い頻度で収録されていることからよくわかる。文章の手本として漱石作品を読んでいた読者たちにとって、うまく文章が書けるようになることは、社会で有用な人材として活躍することとほぼ同義だった。

しかし漱石を小説家・作家とみなす読者は、文章を書くことや作家であることは、社会からのドロップアウトも辞さない求道的行為であるとみなすようになっていく。以上のような歴史的変化を講演「夏目漱石と 書く読者 」および学会発表「文体・ジャンルの社会的機能と 作家/作者 - 書く読者 が見た夏目漱石」で述べるとともに、同題の論文にまとめた。

太宰治についても、書く読者から見ると、

これまでとは違う姿が見えてくる。昭和初期、プロの作家をめざす読者に向けて小説や脚本の書き方を教える雑誌が刊行され、「求道の人」という作家像が大衆の差異化への欲望に利用されるとともに、そのような作家観が文学を特別視する狭小なものであると批判する見方も力を持った。文学・作家・活字メディアの社会的布置をめぐるこのような根底的な変容のプロセスのなかに太宰の自己戯画化があったことを指摘し、論文「太宰治と 書く読者 商品化する“悲劇の作家” - 」で述べた。

(2) 米国日系移民社会における文学と作文

合衆国西海岸地域

文学読者の書く営みと国家主義とは、多くの日本人が移民として移り住んだアメリカ合衆国西海岸地域の日本語コミュニティではどのように関連したのか、20世紀初頭の米国西部における代表的邦字紙「新世界」の投稿欄にみられる文学作品の主題、ジャンル、文体等を、同時期の日本国内の投稿作品と比較し、この時期の「新世界」投稿欄に、古典文学に典拠を持つ定型表現がジャンルを問わず多く見られること、眼前にあるアメリカの自然や人事ではなく、ことさらに紋切り型の 日本 イメージがくり返し発表され受容されていることを明らかにし、その理由を探った。

立志に伴う離郷や友情が、春秋の季節感溢れる美文調で表現される点は国内外で共通するものの、国内ではより無意識的に進んだ言葉と自然表象と国民意識の一体化は、日系移民社会では積極的な感性の選択と自己構築であったことを明らかにし、論文「異郷に響く歌 - 日系アメリカ移民が見た 日本 」として発表した。

ハワイ

ハワイ日系日本語文学の草創期は、日本語の書き言葉が大きく変容した日清・日露戦争期にあたる。この時期のハワイでは、書くことを必ずしも専門としない読者の投稿文学作品が、邦字紙誌を賑わしていた。掲載作品の多くは、眼前にはない日本の自然や風景を、古典的修辭と美意識によって表現するものだった。

これらの作品は、これまでその存在もほとんど明らかにされておらず、研究の対象になってこなかったが、ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館において「やまと新聞」「布哇新聞」「日布時事」「布哇新報」「Honolulu News」「ヒロ新報」等の、この時期に刊行されていた邦字紙の調査を行ったところ、こうした投稿文学作品は、内地の感性や価値観が通用しない現地社会で、内地の自然表象の反復・類比・置換等によって、境遇も出自も言葉も異なる人々を 日本人 にまとめあげ、また編み直す機能を持っていたことが明らかにな

った。同様の結果は、和歌山市民図書館移民資料室所蔵の、ハワイで当時発行された日本語雑誌や図書においても確認できた。以上の内容を論文「やまと新聞」投稿欄にみるハワイ日系日本語文学の草創期」において述べた。

その他

全米日系人博物館 (Japanese American National Museum)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハワイ日本文化センター (Japanese Cultural Center of Hawaii)、東京大学法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター (明治新聞雑誌文庫)、和歌山市民図書館移民資料室等において資料調査を行った。全米日系人博物館では、Takeshi Ban Papers, Rafu Uwamachi Daini Gakuin Records, Shogo Myaida Papers, West Adams Christian Church Records の調査を行った。カリフォルニア大学ロサンゼルス校では、主に日本語教育関連資料の調査を行うとともに、Seiji M. Lippit 教授より知見の提供を受けた。ハワイ日本文化センターでは、日本語教科書・副読本、短歌・俳句集等の調査を行った。また、明治新聞雑誌文庫において、「力行」「力行世界」「中学世界」「少年世界」「国民新聞」「東洋経済新報」等の調査を行った。和歌山市民図書館においては、邦字紙誌、現地発行図書、渡航情報書、移民雑誌、総合雑誌掲載の移民関連情報等の調査を行った。

また、ロサンゼルス、サンノゼ、サンフランシスコにおいて、南カリフォルニア州鳥取県人会、同会の渡邊繁雄会長、竹安成夫・栄子ご夫妻、サンフランシスコ鳥取県人会の Robin Kawabata 氏、小橋司氏、サンノゼ別院日本語学校 (Buddhist Church Japanese Language School) の小橋陽子氏、友愛会、サンノゼ日系人博物館ボランティアのみなさんのご協力を得て、日系二世の方々に、日本語メディア環境、日英語教育歴、日英語の使い分け、芸能に関する体験等を中心にインタビューを行うとともに資料や知見の提供を受けた。また、曹洞宗両大本山北米別院禅宗寺から所蔵資料の閲覧を許可していただいた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

北川扶生子、「やまと新聞」投稿欄にみるハワイ日系日本語文学の草創期」、『日本近代文学』、査読有、第89号、2013、1-16

北川扶生子、「異郷に響く歌 - 日系アメリカ移民が見た日本」、『国文論叢』、査読無、第47号、2013、108-120

北川扶生子、「太宰治と書く読者 - 商品化する“悲劇の作家” -」、『太宰治研究』、査読無、第20巻、2013、114-123

北川扶生子、「日本近代文学におけるコケ

の表象とその変容」、『蕨苔類研究』、査読有、第10巻第5号、2011、121-128

北川扶生子、「美しい故郷の描き方 - 1890-1900年代における出郷物語とレトリック」、『アジア遊学』、査読無、第143号、2011、108-113

〔学会発表〕(計3件)

北川扶生子、「文体・ジャンルの社会的機能と作家/作者 - 書く読者が見た夏目漱石」、『日本近代文学学会関西支部春季大会シンポジウム「文学研究における作家/作者とは何か」(招待講演) 2013年6月1日、関西学院大学

北川扶生子、「夏目漱石と書く読者」、『鎌倉漱石の会(招待講演) 2012年12月9日、臨済宗大本山円覚寺帰源院

北川扶生子、「私をつくる教室 - 文・メディア・自然 -」、『立教大学大学院異文化コミュニケーション学科連続講演会「環境と文学のあいだ 9 メディア・言語・表象」(招待講演) 2011年11月12日、立教大学

〔図書〕(計5件)

北川扶生子、「神戸」、『漱石辞典』所収、翰林書房、小森陽一編、2016年発行予定

北川扶生子、「文体・ジャンルの社会的機能と作者 - 書く読者が見た夏目漱石 -」、『文学研究における作家/作者とは何か』(仮題)、日本近代文学学会関西支部編、2015年発行予定

北川扶生子、「見出される 帝国日本の文化 - 日清・日露戦争期の作文教育と自然・故郷・古典 -」、『日本幻想の比較文化学』所収、ミネルヴァ書房、野田研一編、2014年発行予定

北川扶生子、「阪本四方太と写生文」、『阪本四方太』、鳥取県立図書館編、2013、90頁

北川扶生子、『漱石の文法』、水声社、2012、284頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北川 扶生子 (KITAGAWA Fukiko)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：70304079